

認知症

国立鈴鹿病院院長 小長谷正明

以前にアメリカに留学していた頃、レーガン大統領自らが先頭に立って、ボケを克服しようと、精力的なキャンペーンをしていました。なぜ大統領がそんなに熱心なのだと、留学先の教授に聞きましたら、「ミスター・レーガン自身がアルツハイマー病だからさ」とう政治的なジョークが返ってきました。ところが、それから十年近く経ち、本当に元大統領は自分がアルツハイマー病であると公表し、アメリカのふところの深さを思いました。もっとも、八十数歳ともなれば、アルツハイマー病にかかわらずボケは珍しくありません。アメリカ政府は「脳の一〇年」、わが国は「脳の世紀」の標語で、それぞれ脳や痴呆について精力的に研究を行っています。

老化は避けられない宿命で、顔にシワがよるようになり、脳のはたらきも悪くなり、動作が鈍くなり、頭の回転は遅くなります。年とともに神経細胞は老化し、数が減ります。脳の中にアミロイドという物質がたまり、老人斑とよばれる構造物ができたりします。とくにアルツハイマーの脳では非常に強い。ところが、百歳も生きた人の脳は、しばしば普通の人の七十歳代ぐらいの変化しかないとのこと。ほかの臓器も若く、最初からできが違ふようです。百二十歳の天寿をまっとうした泉重千代さんや、双子のきんさんとぎんさんはスーパーマンなのだと、老人の脳にくわしい先生が言っていました。スーパーパワーのアメリカ大統領でもスーパーマンではなかったようです。

ボケは記憶力の低下からはじまるといいます。昔のことは覚えています、新しいことはだめです。しかし、昨日の夕食で食べたものを忘れたと悲観することはありません。細かいことを一々覚えていたのでは、脳のメモリー容量はすぐに一杯になりますので、どうでもいいことはすぐに忘れるようになってきています。でも、食べたことを忘れたとなると、問題です。やや進行すると見当識障害がはっきりします。自分と他人あるいは周囲との関係などが判らなくなることで、自分が今どこにいるか、周囲の人がだれかなどがわからなければ、ボケは軽いと言えません。さらに重症になると、自分の名前や生年月日などの基本なことも障害され、失禁や不潔行為などが出て、しゃべらなくなります。

アルツハイマー病はつい一五年くらい前は専門家しか知らなかった言葉ですが、いまやボケる病気の代表のように使われています。いろいろな知的機能が徐々に一様に低下する病気です。脳も少しずつ小さく萎縮していきます。進行するとボケだけではなく、大脳の様々な障害もでますので、ケイレンや不随意運動、失語症などもおこります。かつては日本の老人の痴呆は血管障害性のものが多いと言われていましたが、近ごろはアルツハイマー病の方が多いたとも報告されています。六五歳以上の人口の一・五から三パーセントくらいとのこと。増えた理由の一つは、生活習慣の変化によることかもしれないし、CTやMRIなどの診断法の進歩で、精度が上がったためかも知れません。

どういう人がアルツハイマー病になりやすいかは色々な説があり、一定していません。性格は堅くて頑固、内向的で社交性がない人に多いとのことですが、そうではない場合もあり、原因というよりはボケを悪くする因子のようです。一時はタバコを吸わない人がなりやすいという説も出ましたが、逆のデータもあります。酒やコーヒーとの関係もはっきりしません。また、頭の外傷歴がある人が多いとも言われています。ボクサーで痴呆になった人の脳を顕微鏡で調べると、アルツハイマー病と同じような変化が出ています。繰り返される頭部への衝撃で、血流障害や神経細胞同志を結ぶネットワークが破壊されるからと考えられています。ですから、こどもをしかる時に頭をたたくのはよくありません。ものごとを考えて頭をいつも使う人はボケないといわれています。芸術家や政治家など、自分を表現する人はいつも神経のネットワークを使っていて、高齢でも知的機能は保たれており、脳の性能は落ちていません。逆に、高学歴で組織のトップに座っていても、部下まかせでメクラ判を押しているだけではだめです。頭を使わずに受け身で日々を送っていると、かつては使われていた脳のコンピュータのはたらきが悪くなります。せつかくの優秀な頭脳もさびて性能は下がります。リタイヤー後でもは、社会活動や趣味などで自分を前向きに表現することが大事だと言われているのはこのためです。

脳の中のアセチルコリンという化学物質が足りなくなってボケが起こると考えられており、これを増や

す効果のあるアリセプトが使われるようになり、ある程度の効果はありますし他の薬も開発されて来ています。しかし、頭は使い続けていないとダメなようです。

アルツハイマー病とならんで多いボケは血管障害性のものです。脳梗塞や、動脈硬化で小さな脳梗塞が多発してボケてきます。痴呆はゆっくりと進むのではなく、階段状に悪くなります。知的機能が全般的に落ちるのではなく、記憶はだめだが計算力はよいというように、ある機能はダメで別の機能はよいままなので、まだら状痴呆とも呼ばれています。また、脳の動脈が細くなって血の巡りが悪くなったおこるビンズワンガー病や、脳出血やくモ膜下出血の後遺症でもボケることはあります。多少はくすりの治療効果が期待できますが、動脈硬化や脳梗塞をおこすような原因への治療や、生活面での改善で、進行を予防します。脳の血行や代謝をよくする薬がつかわれています。

これ以外にもピック病(前頭側頭型認知症)や、クロイツフェルド・ヤコブ病、ハンチントン舞踏病などと、大変な病気で痴呆が合併します。

中には治るボケもあります。ボケだからとあきらめずに原因を突き止めなければいけません。まずはくすりの副作用です。睡眠薬や精神安定薬、抗うつ薬、向精神薬などは知的機能を下げます。また、ある種のパーキンソン病のくすりや、高血圧や胃のくすりですらボケをおこすことがあります。わりに多いのは、お年寄りで、頭蓋骨の内側にゆっくりと出血して、脳をジワーッと圧迫してボケ症状を出す慢性硬膜下血腫です。これは手術で治ります。また、いろいろな原因で、脳の中での髄液の流れが悪くなる正常圧水頭症も手術でなおるボケです。ボケは脳の全般的な機能低下の症状なので、神経細胞の活動に必要な物質が足りなくなるとおこります。血液中のブドウ糖濃度が下がって低血糖症状でボケるのは、糖尿病の薬の副作用でよくありますし、普通の人でもお腹がすけば、脳のはたらきは悪くなって能率が下がります。ビタミン類の欠乏や甲状腺機能低下症でもおこります。ナトリウムや、カリウム、カルシウムなどの電解質イオンは神経細胞の電氣的な活動のために一定の濃度が必要であり、高すぎても低すぎても機能異常をきたし、精神機能は低下します。また、腎臓や肝臓の障害でも、体内の有害物質が増えてボケることがあります。これからの高齢化社会ではボケは避けては通れない問題です。医療、福祉や介護について考えなければならないことが山積みですが、この欄では、医学からみたボケについて大まかに説明しました。